

2. 関東近海を中心とした今年の海況、漁況（要旨）

平野 敏行（東海区水産研究所）

38年冬春における関東近海の異常低水温は、2月下旬、銚子沖のサバはね釣漁場が突如消滅した時に始つた感がある。これは主に、例年になく異常に常盤、鹿島灘沖に南下した親潮接岸分枝によるもので、これにともなつて、豆南、房総沖の黒潮が大きく南に偏し、しかも、その流路が不安定で激しい変動を繰り返している。このため豆南、房総沖一帯は例年に比べ3~4℃低温を示し、磯底魚類の斃死が各所にみられている。このような黒潮流軸の変動、親潮接岸分枝異常南下の因果関係、成因等については北半球における気象、海洋の大変動とも関連し今後の研究課題と考えられるが、1月における異常寒波の吹き出しにも大いに関係すると考えられるし、又、親潮接岸分枝の異常南下は、黒潮南偏による移流とも考えられる。ともかく、このような、海流系の変化のため、この海域における環境生物（主としてプランクトン）の分布にも大きな変動がみられ、特にサバ、イワシの産卵量が例年に比べ、極めて小さく、サバ、イワシ等漁業資源の再生産への影響が憂慮される。

この海域における異常漁海況の詳細は、一部は既に、会報第3号（特集—1963年冬春期の異常漁海況）に掲載済みであり、又、海況、漁況について、東海区水産研究所研究報告第38号（1964年3月）に、“1963年前半関東近海に現われた異常海況について—予報”（英文）藤森完，“1963年冬春季本邦太平洋沿岸における異常冷水にともなう海洋生物の特異現象—予報”（英文）中井甚二郎他として掲載されるので、こゝでは省略する。